



# とっておきの夏休み!!

## 新しい出会いや発見

## ちよっぴり成長“も”

みなさんは長い夏休みをどのように過ごしましたか。人それぞれでしょうが、なんとなく過ごした人はいませんか。夏休みを有意義に使った人には、新しい出会いや発見がありました。そしてちよっぴり成長もしたようです。そんな3人に登場願いました。



## 海外インターンシップ



法学部2年 浅野麻里さん

「始めはつらくて帰りたいと思ったくらいだけれど、終わってみるとこれほど達成感のある夏休

みはなかった」。夏休み中の9月の二週間あまり、バン格拉デシユの海外インターンシップに参加した法学部2年の浅野麻里さんは、こう言って、目を輝かせた。

### グラミンバンクでインターン

ムハマド・ユヌスさんは、バン格拉デシユの農村で、低所得でなかなか銀行にお金を貸してもらえない人々に無担保融資を行っているグラミンバンクの設立者で、2006年のノーベル平和賞受賞者だ。浅野さんは、このグラミンバンクでインターン活動を行い、「非常に充実していて感動の連続だった」という貴重な体験をしてきた。

現地で戸惑いはなかったのだろうか。「言葉の壁は、感じませんでしたね。コミュニケーションを図ろうという気持ちがあれば大丈夫。私はできるだけ現地の文化に近づくことを心がけていました」という。生活環境に関しては、「シャワーが水しか出なかったり、クラクシヨンが一日中うるさかったり、何もかもが日本と違って珍しく、ホームシックになつたくらい。でも友達ができ始めてから徐々に生活に慣れました」と始めは現地の生活がつかつたと語る。

### 物乞いのおばあさんとの出会い

インターンシップの活動中、「あなた達は私の娘だよ」。浅野さんは、物乞いのおばあさんにこう言われた。グラミンバンクが物乞いの人々のための融資もしている関係で、ドイツ人の友人と一緒に物乞いのおばあさんと話す機会があったときだ。

おばあさんは70歳位で、夫が亡くなった50代後半から物乞いになったという。8人いた子供も、今では1人しか残っていない。グラミンバンクから借りたお金も、その娘が持つていってしまうという。おばあさんは明らかに体調が悪く、話の間も咳が止まらなかった。

浅野さんたちは考えた末、薬を買うためのお金を差し出した。「こんなお金もらえない」とおばあさんは、始め受けとろうとしなかった。元氣になつて欲しいと強く訴えるとようやく受け取ったが、おばあさんはずっと泣いていた。その時、通訳の人が「よっぽど嬉しいんだね」と言った。



### ユヌス総裁と対面する浅野さん

#### 豊かな暮らしのしわ寄せ

「あの日は眠れませんでしたね。一生忘れないと思います。物乞いでやってきた人々の生活を変えるのはなかなか難しい。でも、グラミンバンクの人々は、どれだけ時間がかかっても、愛情をもつてこういった人々と地道にコミュニケーションを図っています」

農村部の女性と話して分かったことは、「豊かになるといふことは、心に余裕ができることということ。貧困から脱出できた女性達を見て、衣食住が満たされるだけでこんなにいい笑顔が生まれるものなんだ」と驚いた。

「貧困を生むのは先進国。自分達が豊かな暮らしをしているということは、どこかにそのしわ寄せがいつているということ。日本人はそのことに気づく機会があまりないんじゃないかと思うんです。いくら援助しても結局は日本をはじめ先進国が変わらなければ何も変わらない」

#### 無担保融資で減る貧困層

グラミンバンクの無担保融資で、貧困層

の人々はまず小額の融資を利用して家畜を飼うなどの個人事業を行っていった、少しずつお金を増やしていく。いわゆるマイクロクレジットの仕組みだ。グラミンバンクは、いまやバンングラデシュ全土に活動範囲を広げ、700万人のメンバーを有する。

「グラミンバンクの成功のメカニズムが知りたかった」という浅野さんは、農村部でのフィールドワークを中心に活動したい、と担当者に頼み、現地では実際に農村部に出掛け、グラミンバンクが融資している女性と話す機会も多かった。

#### 「貧困を博物館に」に感動

このインターンシップに参加しようと思ったのは、大学に入る前、NHKのグラミンバンクの特集を見たのがきっかけだった。その後、『ムハマド・ユヌス自伝 貧困なき世界をめざす銀行家』（早川書房）を読み、「貧困を博物館に」という言葉に感動。大学1年のゼミ論でグラミンバンクについて書いたことで、さらに興味を深めていった。2年になって、法学部のNGO・NPOインターンの授業で、夏休みに国内外のNGO・NPOでインターンをする事になった。インターン先との交渉は自分で行わなければならなかった。「正直、

グラミンバンクに行けるなんて思っていませんでした」というが、一通のメールを送ったところ、1か月もしたら「是非来て欲しい」というメールが返ってきた。このときはたまらなく嬉しくて親に電話したそうだ

### 興味をもったら一歩踏み出す

「将来はアジアの人たちと何かしたい。せっかく日本に生まれたのだから、アジアに何かやれることがあるはず」と話す。今回のインターンシップや、1年のときに参加した東南アジアでのスタディーツアーを通して、自分がアジアの一員であることを実感し、アジアが非常に身近に感じられたという。

何気なく過ごしてしまった1年の夏休みが終わって、自分に何が残っているのかと考えたときに、行動を起こすと決意した。東南アジアのスタディーツアー、今回のインターンで出会った様々な人たちが浅野さんを変えた。「少しでも興味を持ったなら、一歩足を踏み出してみることに。迷ったら、まず行動を起こしてみることだと思います」という浅野さんは、これからも興味をもったことにチャレンジし続けるに違いない。

(学生記者 吉田百合香 II 法学部3年)

## 議員インターンシップ



法学部2年 宮崎真一さん

「たまたま学部棟でチラシをみて、議員インターンシップについて知りました。20歳になって選挙権を得る今年こそ社会勉強をしておきたい、という気持ちも手伝い参加することにしたんです。学生の時にしかできない体験ですしね」

### 7月末から9月末まで2か月間

法学部国際企業関係学科2年の宮崎真一さんは、7月の末から9月末までの2ヶ月間、議員インターンシップに参加した。夏休みをまるまるつぶしての社会体験だった。

インターンシップの間は、ずっとスーツだったのだろう。取材したその日も、宮崎さんは黒ぶち

のメガネに濃紺のスーツで、社会人としての身だしなみだった。議員事務所に入ってさまざまな活動を見聞、体験するのが、議員インターンシップで、宮崎さんが行ったのは、ある衆院議員の地元事務所だった。

「1年生の間は何もたいしたことができなかったんです。だから、2年生になって何かできないかと探していました。それで、コミュニケーション能力を身につけることを、議員インターンシップ参加の大きな目標の一つにした。

### 地元事務所できざまな活動を

議員が選挙区に構える地元事務所には、10人のインターン生がいて、シフトで動いた。仕事は、ポスターの裏に両面テープを貼ったり、ビラを折るといった事務作業から、議員の街頭演説に立ち会ってビラや議員活動報告書を道行く人に手渡しする活動など、さまざま。ビラ配りは、朝の6時40分から始まるので、朝4時には起床する。

「肉体的には非常にきつい2ヶ月間でした。けれど、精神的なモチベーションがあれば乗り切れます。逆に、精神的なものがないときついと思います」

選挙区は5つの市から構成されており、その

ほぼ全域を回り、地元の人たちの声も聞いた。お年寄りから後期高齢者医療制度に対する意見も聞けて、「社会的に話題になっていく問題でもあり、非常によい勉強になった」という。

## コミュニケーション術編み出す

「市民の方々は、もちろん笑顔で接してくれる方もいますが、厳しい方もいます」と、宮崎さんは、その体験の中で自身のコミュニケーション術を編み出していった。「相手の目を見ながら話す、笑顔を絶やさないようにすることを心がけていました。それが相手を警戒させないために必要なことです。そうしないと円滑なコミュニケーションもできません」。

7月末から9月末の2ヶ月間は、日本の政治が動いたときでもあった。しかし、事務所内の雰囲気などは、特に変わったところはなかったという。「議員さんの話によれば、選挙では日ごろの政治活動を問われるそうです。だから、急に特別なことをするわけではないんです」。毎日奔走する議員の姿を見て、あまり良く思っていなかった政治に対するイメージが良くなったという。

## 新たな目標を見据える

事務所に来ていた他のインターン生とは、さまざまな話をした。みんな、何らかの目標を持っていたことに刺激を受けた。「最初は法曹も考えていましたが、どちらかといえば動いていたい方なんです。だから法を運営するシステムのほうに今は興味を持っています」と、宮崎さんは2か月間の貴重な体験を通し、新たな目標を見据えはじめている。

(学生記者 北見英城 II 総合政策学部1年)

## 管弦楽部



商学部4年 戸田圭介さん

## ヴァイオリン漬けの夏休み

サークル棟と呼ばれる4号館の一室にオーケストラ部の部室がある。正式名称は、文化連盟音楽

研究会管弦楽部といかめしい。広さは8畳に満たない小さな部屋で、普段の練習に使われることはほとんどない。主に個人の自主練習の場として使われている。

ヴァイオリン奏者で元コンサートマスターの商学部4年、戸田圭介さんは、学生生活最後の夏休みをこの部屋で過ごした。戸田さんは、オーケストラ部員の記者の先輩でもある。

## 1日5〜10時間、部室で練習

「午前11時には練習を始め、だいたい午後4時半ぐらいまで、遅いときには夜9時過ぎまで練習をしました」と戸田さん。1日平均5〜10時間という練習量だ。基本的には個人練習を行うが、「頼まれれば後輩への指導も行なった」という。

部活の休みが明けてからも、活動日以外の週4日は、同じようにこの部屋で過ごし、週3回の活動日も授業がない昼間の時間は部室で練習した。

オーケストラ部の活動は、週3回の午後6時から9時までが基本だ。夏休みの前半は活動がなくなり、完全に休みの期間となる。この期間は、旅行に行ったり、アルバイトに励んだり、部活のことなどすっかり忘れて遊びまわったり、過ごし方は実に様々だ。

## 「家では自分に甘えが生まれる」

中には定期的に部室を訪れ練習に励む部員もいる。戸田さんもその一人だが、この夏、戸田さんが部室で過ごした時間は他の部員とは比べ物にならない。

「1人で練習し続けるのは意外と辛いですよ」と笑う。では、なぜと思うが、「家で練習していると、



ヴァイオリンを弾くのが楽しくてしょうがない戸田さん

自分に甘えが生まれ、こんなものでいいかなと妥協してしまったり、単純にサボってしまったたりする」からという。部室にいればヴァイオリン奏者だけに限らず、様々な部員が現れる。「互いに刺激を与えあって、『あいつがあそこまでやるなら自分ももっと』とサボる暇もなく夢中で練習できる」というのだ。

## 「学生オケが楽しいから」練習

練習に行き詰まったときも、「嫌な気持ちのまま無理やり練習し続けるのではなく、近くの部員と話したりすることでリフレッシュし、また練習に励むことができる」とあくまでも前向き。夏休み中、自宅から大学までは約1時間かけて、部室通いするだけの意味があるわけだ。

まさしくヴァイオリン漬けの毎日。その原動力は、と尋ねると、「楽しいから」と戸田さんは満面の笑みで答えた。「楽しい？」と記者がたたみかけると、「学生オケが楽しい」という答えが出てきた。

戸田さんは3年次にコンサートマスターを務めた。その頃はコンサートマスターとしての責任や周りの期待にこたえるため、「『やらなければ』という追われるような思いから練習に向かっていた」。しかし、コンサートマスターを引退し4年

になって、「『やりたい。やりたくてしかたない』という気持ちの底から湧き、改めてどんなに好きだったのかを知った」という。

## 「1つの曲にかけるみんなの思い

中央大学のオーケストラ部の定期演奏会は年2回。練習の成果を発表する機会は限られている。おのずと1つの演奏会、1つの曲に対する思いはその都度特別なものとなっていく。また、1つの曲に対する練習期間も長いものとなるため、練習のときの楽しかった思い出やオケの雰囲気など、全体の思いが1つ1つの演奏会に集約されるのである。

「学生オケは1つの曲にかける強い思いを持っている。みんなでその思いを一緒にして、オケをつくっていくのが楽しいんです」

戸田さんがこの夏を通して練習した最後の演奏会が12月5日に開かれる。昨年からの弓を持つ腕に、腱鞘炎による痛みを抱え、日々の練習で痛みが増し、「演奏へ支障をきたすこともある」という。それにもかかわらず「悔いは残したくない。腱鞘炎の痛みを我慢できる限り、今できる最大限のことをする」と言い切った。

(学生記者 篠田有紀Ⅱ法学部2年)